

2020年7月5日

## 心の安らぎ

公開ミサの条件付き再開も三週目を迎えようとしていますが、東京都内の新たな感染者数も高止まりしており、依然として予断を許さない状況です。多くの専門家が指摘するとおり、新型コロナウイルス災害は、「短距離走ではなく長距離走である」ということを改めて実感しています。このような危機的状況の中であるからこそ、かえって日常生活のあり方を見直したり、信仰生活の重要性に気づくこともあるかもしれません。今日も、みことばをご一緒に味わいましょう。

聖パウロは、今日の第二朗読「ローマの教会への手紙」の中で、「〔皆さん、〕神の霊があなたがたの内に宿っているかぎり、あなたがたは、肉ではなく霊の支配下にいます。」（ロマ8・9）と述べて、わたしたちが肉に従って歩むのではなく、キリストの霊に従って生きるように招いています。ここで示される「肉」とは、「敵意」「ねたみ」「憂鬱<ゆううつ>」「怒り」などの一不健全な心の動き一全般を表していると考えることができます。他方、キリストの霊によって生きるとは、「愛」「喜び」「平和」「善意」「誠実」「柔和」（ガラ5・22）などの一健全な心の動き一を示している、と言ってもよいでしょう。

今日のような不確実なときを生きるわたしたちは、自分たちの「肉」の本質的な弱さや不健全な心の動きに、より一層注意を払う必要があるかもしれません。人間社会がもつ弱さやみじめさに自覚的であるとき、「わたしは弱いときにこそ強い」（二コリ12・9）という力強い歩みが、心の中に立ち上がってくるような気がいたします。教皇フランシスコは、6月10日の一般謁見の中で旧約聖書のヤコブにふれながら「人生の夜」について説明しました。

「わたしたちのだれもが、夜に、人生の夜に、たびたび訪れる人生の夜に、神と会うこととなります。それは闇に覆われたとき、罪のとき、道に迷っているときです。そうしたときに、わたしたちはつねに神と会います。思いがけないときに、本当に独りぼっちのときに、神はわたしたちを驚かせてくださいます。その夜、わたしたちは何者かと格闘し、自分がみじめな人間一いわば「あわれな者」一だと痛感します。しかし、そのように自分がみじめだと感じて、恐れることはありません。そのときにこそ、神が新しい名前をくださるからです。その名前にはわたしたちの人生のすべての意味が込められています。

神はわたしたちの心を変えてくださいます。そして、神によって変えられた人にだけ与えられる恵みを注いでくださるでしょう。それは、神に変えていただくようにとの素晴らしい招きです。」

(<https://www.cbcj.catholic.jp/2020/06/29/20942/>)

キリストの弟子として歩むことは、キリストの後に従い「学ぶ」ことに他なりません。「わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの軛<くびき>を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。」(マタ11・29) わたしたちの弱さを自覚しながら、キリストの平和を生きる喜びがもたらされますように祈りましょう。

「重荷を負って苦勞している人は皆、  
わたしのもとに来なさい。  
わたしはあなたたちを休ませてあげよう。」  
(マタイ11・28)

カトリック立川教会 主任司祭  
東京教区 ヨゼフ 門間 直輝